



季刊誌 **AERO FACILITY**

001

Spring 2026

創刊号

02
ご挨拶

季刊誌 **AERO FACILITY** 創刊

04
ファシリティー事業部

シリーズ「すべての病院にヘリポートを」01

徳島県鳴門病院

08
航空機事業部

VERTICON 2026 参加レポート

季刊誌

AERO FACILITY 創刊によせて

平素は格別のご高配を賜り、厚く御礼申し上げます。
これまで各事業部から発行しておりました季刊誌を統合し、この度、新たに「季刊誌 AERO FACILITY」として創刊する運びとなりました。

各誌には、皆さまから多くの温かいご反響をいただいております。
今後は事業部の垣根を越え、エアロファシリティ全体としての多角的な取り組みや、その安全に対する想いをより広く知っていただきたいという願いから、装いも新たに本誌をお届けいたします。

創刊号となる今回は、二つの事業部から注目のトピックをお届けします。ファシリティ事業部では、新連載「シリーズ すべての病院にヘリポートを」を始動。弊社が設計・施工を手掛けた数々のヘリポートについて、その整備の舞台裏や運用状況を順次ご紹介してまいります。その第一弾として、「平時から使えないものは、災害時にも使えない」という強い理念を基にヘリポートを設置した、徳島県鳴門病院の事例をご紹介します。また、航空機事業部では、海外展示会「VERTICON 2026」への参加レポートを掲載。現地で目にした各メーカーの先進的な製品や、業界が注目する新たな取り組みの数々を詳しくご紹介します。

本誌は今後、年4回の発行を予定しております。当社の多様なプロジェクトの舞台裏や最新の業界動向、さらに私たちをより身近に感じていただけるプチコラムなども充実させていく予定です。

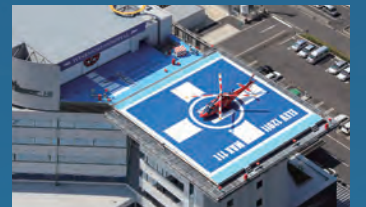
読み終えてからもお手元に長く残していただける、風格ある一冊を目指してまいります。新しく生まれ変わった「季刊誌 AERO FACILITY」を、今後とも末永くよろしくお願い申し上げます。

阪神・淡路大震災の際、ヘリコプターが出動できない現実を目の当たりにし、「災害時に使えないヘリポートがあってはならない」という創業者の想いから当社は誕生しました。この想いを原動力として生まれた、ヘリポート建設を主体とする「ファシリティ事業部」と、航空機・装備品を提供する「航空機事業部」の二つの柱で展開する、弊社の取り組みをご紹介します。

ファシリティ事業部 ヘリポート事業

美しいデザインが、安全につながる。

ファシリティ事業部は、ヘリポートのコンサルティングから設計、施工、そして運用後の保守メンテナンスまでをトータルで手掛ける、ヘリポートのプロフェッショナル集団です。これまで、地域医療の拠点となる病院の屋上ヘリポートを中心に、官公庁や大型物流施設など全国130カ所以上の設置実績を誇ります。特許を取得している軽量かつ強靱なアルミデッキヘリポートは、南極昭和基地でも採用されるなど高い技術力を持ちます。近年は次世代モビリティ「空飛ぶクルマ」の離着陸場「Vポート」の構築にも挑んでいます。



航空機事業部 航空機・装備品販売事業

空の安全を培った信頼でサポートする。

航空機事業部は、航空機の販売から装備品の提供、防衛事業まで、日本の空の安全と運用をトータルにサポートする専門技術集団です。次世代機「LEONARDO AW09」などの国内代理店を務めるほか、迅速な部品調達や修理対応により、お客様の円滑な運航を支えています。防衛分野では、陸上自衛隊へ練習用ヘリコプターを30機納入した実績を持ちます。機体の導入にとどまらず、整備支援業務や、パイロットの操縦教育といった専門的なサポートも実施し、お客様の運用体制を総合的に支援しています。



徳島県鳴門病院 ヘリポート

南海トラフ地震を見据えた災害対策施設



1. 新設された施設は、病院本館の色彩に合わせたクリーム色を採用。周囲の景観に配慮し、地域に安心感を与える温かみのある佇まいとなっている

2025年7月、徳島県鳴門市に位置する徳島県鳴門病院（307床）において、地域の救急・災害医療を力強く支える新たな拠点「徳島県鳴門災害対策施設（ヘリポート）」の運用が開始されました。本施設は、同院の外来駐車場内に建設された鉄骨造4階建て、延床面積1063.18平方メートルの建造物です。既存の病院本館とは3階および4階の専用渡り廊下を通じてシームレスに直結しており、施設内の迅速な上下移動を可能にするエレベーターと階段を完備しています。

整備の背景にあるのは、近い将来の発生が危惧される南海トラフ巨大地震などの未曾有の大規模災害に対する、極めて強い危機感です。当初は病院全体を津波から守る防潮壁と同時に整備する計画でしたが、国の津波被害想定が見直されたこと

を受け、広域災害医療の生命線となるヘリポートの先行整備が迅速に決断されました。

設計の根底にあるのは「フェーズフリー」という考え方です。1階には患者の搬入・搬出をスムーズに行うための専用エリアや、救急車が待機できるエリア、さらに自家用発電機を設置しています。上層階には自衛隊ヘリも離着陸可能なヘリポートや医薬品の備蓄倉庫、DMAT隊員待機室などを備えています。

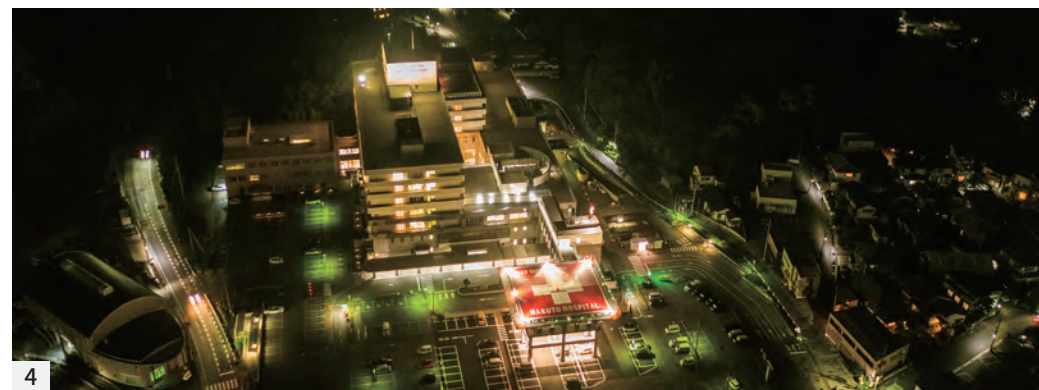
これらの充実した設備は、緊急時のみの設備ではありません。平時においても院内の会議や医療スタッフの研修、地域住民への説明会などに幅広く活用されます。日常から災害時まで、いかなる状況下でも地域医療の安全と人々の命を守り抜く、多角的な運用が力強くスタートしています。



2



3



4

地域医療が抱えていた喫緊の課題

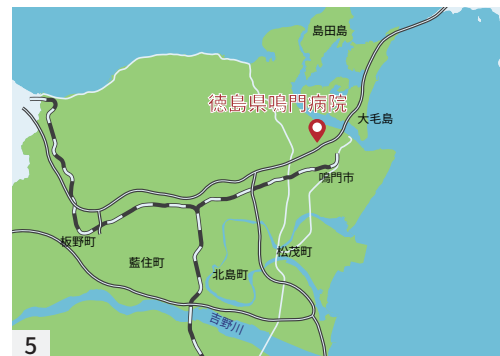
徳島県鳴門病院は、吉野川北岸において唯一の災害拠点病院として広域な診療圏域を担っています。しかし、長らく吉野川北岸にヘリポートが整備されていないことが、地域医療における喫緊の課題となっていました。

これまでドクターヘリを利用する際は、近隣の運動公園をランデブーポイントとしていました。そこでは離着陸時の強烈なダウンウォッシュ（吹き下ろしの風）による砂塵の飛散を防ぐため、事前に地元消防隊が急行してグラウンドに広範囲の散水を行う必要があり、一刻を争う搬送において非常に多くの時間と労力を要する運用が続いていました。

また、土のグラウンドへの着陸は、

操縦するパイロットや医療スタッフにとっても極めて神経を使う作業でした。住友理事長兼病院長は当時の苦労を振り返り、「グラウンドのような環境への離着陸は、パイロットも非常に気を遣うものでした」と語ります。不安定な着陸環境での運用は、緊迫する救命の現場において、常に見えない心理的負担となっていたと言えます。

今回、専用のアルミデッキヘリポートが院内に完成したことで、日々の搬送環境は大きく改善されました。事前の散水作業が不要になり、搬送の迅速化が図られただけでなく、離着陸時の安全性が飛躍的に高まりました。「着陸場所が安定していることで、意識や視点の多くを患者さんに向けられるようになります」という言葉の通り、インフラの整備が、地域医療の質そのものを高めています。



5



6

2. 屋上ヘリポート。耐久性・耐候性に優れるアルミデッキヘリポート。大規模災害時も想定し自衛隊の中型ヘリコプターも離着陸できる造りとなっている
3. 渡り廊下から見たヘリポート。段差や凸凹がなくスムーズな搬送が可能
4. 夜間でも安全な離着陸を可能にする照明設備を備えている

5. 吉野川北岸エリアで唯一の災害拠点病院として、広域な診療圏をカバー。新たなインフラにより、地域の救急・災害医療体制が強化された
6. ヘリポートと渡り廊下を含めた全景。24.8m × 23.1mのヘリポートは、小型ヘリから大型ヘリまで十分に対応できる広さがある

日常と有事を繋ぐ、 4 階建ての設備構造

徳島県鳴門災害対策施設は、各階に高度な防災・救急機能を備えた4階建ての構造です。1階は救急車が乗り入れる搬送エリアや自家用発電機を設置。2・3階にはDMATの活動拠点や備蓄倉庫、病院本館へ直結する渡り廊下を配置し、迅速な動線を確保しました。4階には大型機も発着可能な堅牢なアルミデッキヘリポートを整備し、有事の初動対応を支えます。

1 階 2 階

地上階となる1階には、患者の搬入・搬出をスムーズに行うための専用エリアと、救急車が直接乗り入れて待機できる広々とした待機エリアを整備しました。また、受入れホールのほか、大規模停電などの非常事態に備えた自家用発電機も設置されており、災害拠点インフラとしての完全な独立性と強靱性を確保しています。

2階部分は、倉庫として機能します。

3 階

災害医療の中枢を担うフロア

3階は、災害時の医療継続を支える中枢フロアです。最大の特徴は、室温が常に25度以下に保たれるよう厳密な空調管理が施された医薬品用の備蓄倉庫です。温度変化に敏感な輸液や救急薬剤の品質を安全に維持でき、有事の際にはこの空間をそのまま「サ



1

テライト薬局」として展開できる画期的な設計となっています。さらに同フロアには、DMAT（災害派遣医療チーム）の専用待機室を配置しました。壁面には100インチの大型モニターが設置され、有事の際には災害状況や広域の医療情報が投影される最前線基地（コントロールルーム）となります。一方、平時にはこの充実した空間と視聴覚設備をそのまま活かし、院内の会議や医療スタッフの研修、さらには地域住民に向けた説明会を行う多目的スペースとして日常的に活用されます。

4 階

軽量かつ衝撃荷重に強い
アルミデッキヘリポート

最上階の4階には、本施設の核となる専用の屋上ヘリポートが設けられています。最大の特徴は、床面に採用された軽量かつ衝撃荷重に強い「アルミ

デッキ」です。従来のコンクリート製に比べて建物の躯体にかかる荷重負担を大幅に軽減できるだけでなく、耐候性にも優れています。

専用の屋上ヘリポートが整備されたことにより、これまでの土のグラウンドでの着陸で大きな課題となっていた、周囲への砂塵の巻き上げや飛散被害を防止することが可能になりました。これにより、一刻を争う救命の現場において事前の散水作業などが不要となり、より安全かつ迅速な搬送が実現しています。

耐荷重は12トンで、ドクターヘリのみならず、重量のある自衛隊の中型ヘリコプターの受け入れも可能です。大規模災害時における広域搬送の拠点として極めて高いポテンシャルを備える一方、デッキ表面は周囲の景観と美しく調和するクリーム色に塗装され、地域社会に威圧感を与えない細やかな配慮がなされています。



3

日常と有事を繋ぐ フェーズフリーの運用

これらの最新設備を最大限に活かすためのキーワードが、「フェーズフリー」です。フェーズフリーとは、日常（平時）と非日常（災害時）の垣根を取り払い、普段から利用している施設や設備を、そのまま災害時の備えとして機能させるという考え方を指します。住友理事長兼病院長は、「平時から使えないものは、災害時にも使えない」と力強く語ります。いざという時にのみシャッターを開けるような「特別な日のための防災施設」では、混乱を極める災害現場でスタッフがスムーズに運用することは極めて困難です。だからこそ、この鳴門災害対策施設は、日々の医療活動の延長線上で活用されることを前提に設計されました。前述の通り、3階のDMAT待機室を平時のカンファレンスや地域住民への説明会に活用しているのもその一環です。日頃から使い慣れた空間と設備であるからこそ、有事の際にもスイッチ

5



4

を切り替えるように、スタッフが迷うことなく災害対策の最前線基地として稼働させることができます。1階の待機エリアや受入れホールも、日々の救急搬送の動線として日常的に使用されることで、安全で迅速な手順がスタッフの身体に自然と根付いていきます。「特別な施設」ではなく、「毎日の地域医療を支えながら、そのまま有事の防波堤になるインフラ」。このフェーズフリーの体現こそが、南海トラフ巨大地震という未曾有の危機を見据えた、徳島県鳴門病院の一つの最適解と言えます。

ドローン運用も視野に 描く地域医療の未来

今後の展望として視野に入るのが、無人航空機（ドローン）を活用した広域ネットワークの構築です。大規模災害時に道路網が寸断された場合、空からのアプローチが地域の命綱となります。将来的には有人機による患者搬送と、ドローンを用いた物資や医薬品の

運搬などを組み合わせ、より網羅的で効率的な医療物流の仕組みを地域全体で作っていくことが期待されています。今回、専用ヘリポートが完成したことで、グラウンド着陸時の砂塵対策など、長年抱えていた平時の物理的な課題は解消されました。しかし、堅牢なハードウェアが整ったからといって、災害時の課題がすべて解決したわけではありません。予測不能な混乱が生じる有事においては、真に地域の命を守るためには、設備を動かす「人」の備えが不可欠となります。

だからこそ、「平時から使えないものは災害時にも使えない」というフェーズフリーの視点が重要になります。特別な日のための施設にするのではなく、日常の延長線上で活用し、いざという時にスタッフが迷いなく動ける体制を構築する。徳島県鳴門病院が実践するこの運用概念は、一つの病院の枠を超え、これからの地域医療や災害拠点のあり方に重要な視点を提示しています。南海トラフ巨大地震を見据え、地域全体の医療体制をいかに維持していくか。新たな空のインフラを通じた、次世代の災害医療への取り組みが始まっています。

6



1. 病院本館と渡り廊下で直結する災害対策施設の外観
2. 写真左から、1 階搬入・搬出エリア、受け入れホール入り口、救急車の待機エリア
3. 厳密な空調管理が施された 3 階の医薬品用備蓄倉庫
4. 大規模災害時に DMAT の活動拠点となる隊員待機室
5. 本館と直結した災害対策施設の全景。右手の病院本館へと続く専用渡り廊下と、中央の搬送用エレベーターがスムーズな動線を確保。左手の棟には DMAT 待機室や備蓄倉庫、屋上のアルミデッキヘリポートといった施設が集約されている
6. アルミデッキヘリポートは衝撃荷重に強く、ヘリコプターが繰り返し離着陸できる頑丈な造りとなっている

【ファシリティ事業部】 お問い合わせ
TEL : 03-5402-6810
Mail : facility@aero.co.jp

VERTICON®

Atlanta 2026 | March 9-12
POWERED BY VAI | Exhibits March 10-12

2025 年の HAI からのリブランディング後、最大規模となったアトランタでの「VERTICON 2026」は、世界 80 カ国から約 12,850 名が来場し大盛況のうちに幕を閉じました。

会場には最新鋭ヘリコプターや次世代エアモビリティ「空飛ぶクルマ（eVTOL）」など、計 64 機の実機が集結、684 社の出展ブースが並びました。弊社が代理店を務める Leonardo AW09 をはじめ、個性豊かな各社の展示ブースで来場者を魅了しました。

本年も弊社取り扱いメーカーが多数出展していましたので、現地の様子を一部ご紹介いたします！
次回 2027 年は 3/15 ~ 18 にカリフォルニア州アナハイムにて開催予定です。



PAGE GUIDE

- 09 **LEONARDO AW09** ...ヘリコプター
- 10 **AEM**スピーカー
- 11 **REISER**..... シミュレーター
- 12 **LD** ヘルメット
- 13 **swis rotor services** 修改ウィンドウ
- 14 **Helitowcart**運搬機
- Electra Aero**次世代ハイブリッドSTOL機
- 15 **ENSTROM**ヘリコプター



AW09 に関する最新情報として、2026 年夏頃の EASA TC 取得、ならびに 2026 年内の初号機納入予定が発表されました。Metro Aviation 社のブースにて展示された AW09 のモックアップは、実際にコックピットへ搭乗できる体験型展示として、多くの来場者から関心を集めました。

Leonardo 社のブースでは、警察仕様および EMS 仕様の AW139（計 2 機）と、米国フィラデルフィア生産の訓練機 AW119T（1 機）が展示されました。なお、各展示機体には、弊社が代理店を務める AEM 社製の電源が使用されています。併せて VXR シミュレーターの展示・体験も行われ、こちらも盛況を博しました。



全世界のオペレーターに実績を持つ機外スピーカー・オーディオシステムのリーディングカンパニーであるAEM社。今年は新製品「LHS41」の発表がありました！「LHS41」は中・大型ヘリコプター向けに設計・認定を受けたAEM社の最新技術を結集したモデルであり、コンパクトで軽量の設計ながら、高出力かつ高音圧（142dB）で従来品の3倍の大きさで聞こえる次世代の拡声スピーカーシステムとして紹介されていました。



REISER SIMULATION • TRAINING

今回、H125（AS350 B3）に特化した最新のVRシミュレーター Veris VR Flight Simulator が新製品として発表されていました。

また、「MR ビジュアル」、「フルハプティックコックピット」、「ロールオン／ロールオフ・モジュール技術」という3つの最先端技術を組み合わせた世界初のシミュレーター H145 D3 XR（Mixed Reality）が2026年3月にEASAよりFTD-3として承認されたとの発表がありました！



© 2026 Reiser Simulation and Training GmbH





ご好評いただいております LD 社製航空ヘルメット。
2025 年度も民間、警察、消防防災の皆さまに広く
お引き合いをいただきました！
フランス海軍でも採用されており（右中）、ヨーロッパ
を中心に海外でも人気のヘルメットです。



■ ■

**swiss
rotor
services**

パイロットが座った状態で、真下や斜め下の視界を確保可能になる H125/AS350 用ウィンドウが紹介されていました。

操縦席のドア全体を外側に大きく膨らんだバブル形状の透明窓に交換するキットである MAXIMUM PILOT VIEW KIT (MPVK) とドアの形状のままに、操縦席の床（フロア窓）を大幅に広げるキットである SMART PILOT VIEW KIT (SPVK) の 2 つのタイプが案内されています！

Visibility

Precision

Safety

■ ■

**swiss
rotor
services**

**MAXIMUM
PILOT VIEW KIT**
FOR H125/AS350



同社独自の『リフト&キャリー』方式で機体を浮かせ、雪上や凹凸のある路面でも負担なくスムーズに運搬。直感的な操作で、従来は数人がかりだった移動作業を一人で安全かつ精密に完結させ、格納庫の効率的な運用を支えます。

2025年度は6台の運搬機を国内で導入、2022年度に国内で2台導入されて以降、全国で通算12台を超える導入実績があります！ぜひお問い合わせください！



空飛ぶ車（eVTOL）やドローンが注目されている中、おもしろい航空機を発見しました！

電動推進による低騒音・低排出を強みとする次世代航空機として Electra Aero 社の EL9 が Verticon 2026 に展示され注目を集めていました。離着陸距離の短さ（150ft）と舗装されていない場所でも運用可能であることが特徴です。災害時にはパワーサプライとしての運用も可能であり、場所を選ばない離着陸に加え防災機としての可能性も大きく秘めています！



480B 向け新型 CRFS（耐衝撃燃料システム）の FAA 認証が完了したとの発表がありました！米国内で新造機の販売と納入が法的に再開可能となりました。



VERTICON 2026 のレポート、いかがでしたか？
ENSTROM の朗報や LD のヘルメット、そして存在感を放っていた Leonardo 社のブースなど、会場には次世代の空を支える確かな技術が集結していました。
私たち航空機事業部は、業界の情報ナビゲーターとして、世界の最前線から皆さまの現場に役立つ製品をご紹介します。業界の新しい動きも逐次ご案内してまいりますので、気になる製品がございましたら、ぜひお気軽にお問い合わせください！

【航空機事業部】 お問い合わせ
TEL : 03-5402-6884
Mail : min@aero.co.jp

ヘリポート、その先へ。



エアロファシリティ株式会社

〒105-0004

東京都港区新橋1-9-5 KDX 新橋駅前ビル11F

Mail : aero_pro@aero.co.jp

ファシリティ事業部

TEL : 03-5402-6810

Mail : facility@aero.co.jp

航空機事業部

TEL : 03-5402-6884

Mail : min@aero.co.jp



aero.co.jp



お問い合わせ

編集後記

最後までお読みいただき誠にありがとうございます。取材にご協力いただいた皆様のおかげで、無事に創刊号をお届けできました。今後は事業部の垣根を越え、弊社の多様なプロジェクトや業界の最新動向をさらに深く掘り下げていく予定です。「こんな情報が知りたい」といったご意見もお気軽にお寄せください。次号もよろしく願っています。

次号予告

次号は、四月に弊社が主催いたしました「大島そらまつり」の特集を予定しております。地域の皆さまと空をつなぐイベントの模様を詳しくレポートいたします。どうぞ楽しみに！